

後継者に説いた“誠”の大切さ

立花宗茂

一龍斎貞花

講談師

高橋紹運じょううんの嫡男ながら、立花道雪の懇望により養子となり、道雪の娘・闇千代くろちよと結婚。しかしこの闇千代は紹運・道雪の主君大友宗麟の落とし子ともいわれ、道雪は娘ながら男勝りの闇千代に城主の座を譲っていたから、2歳下の婿を側へ寄せつけない有様。

流石豪勇紹運の嫡子、秋月との合戦に初陣、敵の豪傑を押さえつけ部下に首をとらせ手柄を立てさせてやるという思いやりのある将、立花宗茂（後年に改名した名であるが、宗茂の名が通名となっているので宗茂で）

島津の大軍は宗茂の実父・紹運の岩屋城を大苦戦の末に落とし、続いて宝満城をも攻略。宗茂籠もる立花城はたちまちのうちに包囲された。しかしそうこうするうち援軍の秀吉軍が豊前へ上陸。島津軍は九州平定をあきらめ退却を開始。

ここぞと宗茂、退却する島津を猛然と攻め、島津勢を打ち破り、その勢いで高鳥居城、続いて岩屋城、宝満城を奪取、この間わずか1ヵ月足らず。さらに秀吉の先陣をつとめ秋月を攻め、島津攻めに大功をあげ、筑後13万石・柳河城の城主となる。

その後、小田原の陣、朝鮮の役では参謀をつとめ、明兵との戦いを勝利に導く。

家来の再就職と、主従の絆

天下分け目の関ヶ原合戦を前に、徳川家康、石田三成両者から勧誘されるが「豊臣家を守護する」と西軍に味方・それでも家康あきらめず、高禄で誘ったほどである。

三成敗戦の報を聞き、退却の際、瀬田の唐橋を焼き落とそうとする部下に、「古来、橋を落として利を得たることなし。人々の往来困難となり難儀しよう。橋を落としてはならん」

ただ逃げるだけを考えぬ立派な敗将であった。このとき宗茂32歳。

柳河に帰城するも東軍勢に包囲され、秀吉時代からの盟友で東軍についた加藤清正のすすめで城開け渡し。清正や前田利家などが熱心に仕官をすすめるも、宗茂それを断り浪人となる。このとき家臣の再仕官を信頼する清正に依頼。わずかな人数のみ連れて落ちる宗茂に、家来たちは、「どんな苦勞もいとませぬ、何卒お連れ下さい」と、皆涙を流して同行を

懇願したほど。いかに家臣を大事にした
トップであったかがわかります。

家康側近が旧豊臣家臣の合体を咎める
のもかまわず、清正は多くの宗茂の家臣
を取り立てた。清正も勇猛のみにあらず
情に厚い武将でありました。

西軍についた者許すまじという家康で
あったが、「宗茂が関ヶ原に参加してい
れば負けていた」というほど、宗茂を評価。
家康、二代秀忠の熱心な誘いに応じ江戸
で両者に拝謁、陸奥国棚倉（福島県東白
川郡）に1万石を与えられて棚倉藩を立て、
宗茂に実子なく養子に迎えた弟高橋直次
の4男忠茂に、松平忠宗の娘を娶り、旗
本の列に加わり2万石加増され3万石の
大名に。大阪の陣においては一族上げて
参陣し、その功により元和6年旧領筑後
に復帰、もとの家来たちも宗茂の徳を慕っ
て帰参、城を修築し10万9千石をもって
立花柳河藩が成立した。

関ヶ原の戦いで徳川に味方した福島正
則はじめ、多くの大名を取り遣した秀忠
が、宗茂の誠実な人柄を見込んだればこ
その禄高。徳川に敵対しながら旧領地に
復帰するなどは全く考えられないことで、
秀吉は「百万の軍勢をまかせられるのは、
宗茂と蒲生氏郷よ」と評価しており、豊臣、
徳川両氏から、これほど信頼された武将
は稀有とあってよいでしょう。

20年ぶりの帰国、宗茂はもとより、家
臣、領民の喜びはいかばかりであったろ
う。その後の島原の乱でも大働き。

後継に“誠”を説く

宗茂は、2代藩主となる忠茂や家臣に、
「終身行なうべきことを一言をもって伝え
る。それは“誠”なり。世に『盲人千人、
目明き千人』と申すことあり。誠の一字
をもって主家に仕えれば、必ずやあらわ
るるなり」

折にふれ、誠の大切さを説き聞かせた
のである。

寛永15年、剃髪して立斎と称し、19年
11月25日、江戸藩邸にて74歳の生涯を
閉じたのでございました。

その死の直前、忠茂や家臣に、

「戦は兵の多少に依らず、和の兵なくて
は何ほどの大人数たりとも勝利なきもの
なり。道雪以来、我らにおいても少人数
にて度々大勝利を得たり。これ兵の和ゆ
えなり。その和のものは日ごろねんごろ
にするにあり。一言の義にても身を捨て
るものなれば、大将たる者心得べきこと
なり」 死の直前まで誠を説いた宗茂。直
江兼続を「義」の将とすれば、宗茂は「誠」
の将といえるであろう。大河ドラマの主
人公になってほしい宗茂です。



「戦国武将 生死を賭けた烈語」

(中経文庫・600円) 上梓。貞花8冊目の
著書。人材活用・スピーチ・朝礼にご活
用頂けます。ご購入賜れば幸いです。